

「未来へつなぐ命」

谷汲小学校六年

植山 あおい

みずほがガラス戸を開け、庭に出た最後の場面、スイセンのすがすがしい香りがしてくるようだった。アジサイ、柿の木、黄色く実った稲、ヒガンバナ、サザンカ、キンモクセイ。みずほとおじいちゃんのおぼには、いつも色とりどりの草花が生きていた。この本は、みずほとおじいちゃんがゆっくりとお話してきた時間を、私にも分けてくれた。

祖母ととも暮らすみずほの家族は、私の家族となんとなく似ている。私の場合、祖母が草花が好きで、私にその名前や育て方などを教えてくれる。そのおかげで、わたしも草花が大好きになった。だからだろうか、みずほとおじいちゃんのお姿が私と祖母と重なった。

おじいちゃんのがんが分かったとき、家族の思いに反しておじいちゃんに積極的な治療を拒否した。「どうして？ ちよつとでも長生してほしいのに。」とみずほがおもったように、もし私も、大好きな祖母がおじいちゃんと同じような選択をしたら、なんで？ とくやしがると思う。おじいちゃんは、病院で、「家に帰りたい。」と言い続けてなくなつた自分の母親のような終わり方をしたくなかつたのだ。「自分らしい生活をして、家で過ごしてほしい。」というおじいちゃんの気持ちが少しだけ分かつたような気がした。

でも、おじいちゃんは、死ぬのはこわくなかつたのだろうか。私は、こわい。「死んだらどうなるのだろう。」とか「死んだら、私のなにかもが終わってしまう。」と考えたこともある。おじいちゃんには、おばあちゃんに言った。「死は生きていることの終わりやなくて、つづきや。これからもきみといっしょやで。だから、これからの毎日をたいせつにおくりに

いんや。」と。死が生きることの終わりではなくて続きとは、どういふ意味なのだろう。おじいちゃんはずほに「たとえあした、世界が滅亡しようとも今日私はりんごの・を植える。」という言葉の話をした。りんごの・を植えるのは未来への希望だと。つまり、おじいちゃんが死んでも、おじいちゃんのおりんごの・（「みずほや義人、おばあちゃん、お父さん、お母さん、育ててきたお花」）は、これから生きていく。だから、おじいちゃんが亡くなつても、おじいちゃんの命は未来へと受けつがれていくことなのだと思うた。「つないでいくんやなあ、命あるもんはずべて。」おじいちゃんの言葉は、実に自分の命に対して正直だ。そしてその生き方は美しい。



みずほとおじいちゃんとの時間をいつの間にか共有していた私にとって、おじいちゃんへの死は、あまりにも辛すぎた。最後に「……ありがとう、おじいちゃん。」と声をかけたみずほの想いがじんわりと伝わり、思わず涙がこぼれた。と同時に、おじいちゃんの残してくれたものをみずほといっしょに受け取ったよ

うな気がした。私は、生きていく日々の大切さを今改めて感じている。
大谷美和子、白石ゆか作
『りんごの・を植えて』ポプラ社

【講評】

輪に入れていない子に声をかけたり、下の学年の子にアドバイスしたりと、周りの子の仕草や行動に目を向け、相手の気持ちに気づいて行動することが出来るあおいさん。そういつた気遣いが主人公の気持ちになつて、読み深められることにつながっています。